

国語科(中)

国中平22

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

動物が好きな人はたくさんいます。しかし、「好きさ」にもいろいろあるみたいです。それを大きく分けてみると、ペット好きの人と、野鳥を見るのが好きな人に代表されるような傾向と、二つあると思います。かわいいから好きだというペット好きは、動物の生活に※1干渉して自分との間に特別な関係をつくって、それを楽しむ。自分との関係が親子、あるいは恋人みたいに、親しければ親しくなるほど、大事な動物になるのです。ネコ好き、イヌ好きといっても、自分のかわいがっているコタイ以外のイヌやネコの運命というものは、あまり視野に入っていない。捨てイヌや捨てネコが、毎年八〇万頭以上も保健所などの公共機関の手によって殺処分されているのですが、この問題に目をむけるペット愛好家はほとんどといってよいくらいいないのです。

鳥を見て楽しむ人たちにとっての動物の大切さは、自分との直接の関係ではありません。自然界で暮らしている様子がおもしろい。この種のおもしろさは、人間があまり干渉するとこわれてしまうから、自分とは独立した別の世界として楽しむ。ですから同じ動物好きといっても、①なかみはずいぶん違います。

家畜の歴史全体を通じて見ても、②最近の人間と、ペットとしての動物とのつきあい方は、大きく歪んできているというか、非常に特殊になつてきていると僕には感じられます。たとえばイヌは、もともと狩猟の仲間として人間にとって実用的にも大いに役に立つ動物でした。しかも、「忠犬ハチ公」のような人間の従者としてのイヌというよりは、お互いに協力して狩りをして獲物を捕るという、もつと対等な関係ですね。

人間がいろいろな工夫をしてイヌの能力を使いながらお互いに協力して獲物を仕留める。そして獲物はちゃんと分配する。イヌも満足する。持ちつ持たれつの関係で、いわば健康な関係だったと思います。それが狩猟の時代が終わって農耕の時代になり、財産ができてくると王様が番犬や軍用犬として飼うという形で、ある程度歪んでくるわけです。対等な関係からはなれて、かなり歪んでいきますね。さらに貴族社会になってくると、完全に王侯貴族が※2愛玩動物として飼う。そして「ペット」の誕生です。

今の時代になってくると、ほとんど③ペット以外には、イヌの生存の余地がないという形です。ネコの場合も、古代エジプトの食糧庫をネズミから守るために、そこらをうろうろしていてくれればいいという、割りにタンジューンな関係で家畜化のはじめの段階は成立してきたものが、いまはマンションの一室で、ひたすら閉ざされた空間のなかで一生を終わるという関係が出てきた。はたしていまのペットの役割は、社会の歪みに疲れた飼い主の精神状況の慰め手なのか、本来人間は動物をかわいがりたいという性質をもっている、必要欠くべからざるものとしてあるのかどうか。そのへんがわからなくなってきた。

ネコとかイヌにしてみれば、異常ともいえる一生を送るわけです。野生の性質を残しては、ペットとしては困る。たとえばイヌが猛々しくなつて、縄張りを主張するようになると人間は困る。まして自分がリーダーになつて主人をしもべにしようなんてとんでもないわけです。実際にそういうことがよくあるらしくて、飼いきれなくなつたというのは大体そういう事情です。

自然界では本来そういうしくみになっているわけです。△れのなかに産まれた子供は、ある年齢まで行くと、自分のほうがリーダ

(注意) 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

1に立ちなくなつてきて、様子を見るわけです。ちよつと反抗してみるとか、いろいろな手探りをする。そのときにこつびどくやられるといった経験を積むなかで、自分の立場を知っていく。それが人間に飼われて甘やかされたときは、そのままリーダーの気分になつたりすることがある。「不良犬」の誕生です。飼い主のベッドを占領して、飼い主はベッドの下で寝ているといったことが、実際にあるのです。

その結果口輪をはめられたり、うるさいということで外科手術で声帯を取られたりする。④そういうペットたちはこれからどうしていったらいいのか。たとえば彼らを再び野生状態に戻しても、幸せに生きていくことはできないですね。もはや人間といつしよに生きていくしかない。

これからは、おたがいの世界をもうちよつと尊重し合うという視点が無いといけないと思います。いままではもつぱら人間のつごうで動物たちを、人間の精神的な欲求を満足させるための道具として見てこなかつた。それを徹底して、大人になつても赤ん坊みたいなネコとかイヌとかまでつくり出してしまった。彼らは困っているのです。

たとえば体が小さいのがかわいいというので、※3チワワやポメラニアンみたいな品種をつくつちやう。丸顔が好きなのですから、丸顔のイヌをやたらにつくる。ネコはもともと丸顔ですが、丸顔のイヌなんて、頭の形自体変形させられている。彼らの顎は短くされて、ろくに歯がはえる場所もない。だから歯ならびが悪くなつて、歯槽膿漏になるとか、そういう苦痛を抱えさせながら、人間は残酷にも、自分がかわいがりたいという欲求を満足させる。

そういう、一方的に動物の気持ちを理解した気になつてやたらかわいがるといふ姿勢は、もはやほとんどキョクゲンにきているんじゃないでしょうか。ちよつと視点を変えて、むしろ□を見る人のように、相手の世界のおもしろさも見ていく。相手を尊重するという感じをもうちよつとつけ加えることが必要です。

彼らが、もともとどんなものなのかを理解しようとすれば、飼う場合でも、どれがふさわしい姿なのかをもう少し見えてくるはずだと思います。いまは、本来の野生状態からいえば、病的な姿がいいとされています。その結果、たとえば、⑤大人になつてもまだ母ネコからおっぱいをもらっているネコがたくさんいます。親のほうは暇だし、子ネコも、大人になつてもやる仕事がない。狩りにいかななくていい。なかで発散しないと時間がもたないということから出てくる異常な行動なのではないでしょうか。

動物をかわいいペットとしか見ないで、本来の生活の構造を無視していくと、どんなそんなという精神病理的なゲンシヨウが出てくる。それはこれからの人間の姿を先取りして示しているともいえます。あまり管理すると、野生状態での生活は一体どうであつたのかということ、わからなくさせてしまう。イヌは本来、あちこちろつき回つて、いろいろな楽しみを自分で見つけ出しながら生活を成り立たせていたのに、法律で鎖につながなきゃいけないということ、管理していく。

イヌを、たまに散歩に連れていくと異常に喜ぶというのは、飼いが一緒だからというよりも、おさえられていた自分の探究心が満足できるということなのだと思います。

(今泉吉晴 『空中モグラあらわる』より)

【注】※1 「干渉」
かんしやう
他人の物事に立ちいって、自分の意思に従わせようとする事。

※2 「愛玩」あいがん Ⅱ 身近においてかわいがること。

※3 「チワワ」「ポメラニアン」
 Ⅱそれぞれ、イヌの種類。

傍線部 ぼうせん a と e のカタカナをそれぞれ漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「なかみはずいぶん違ちがいます」とありますが、その違ちがいについて説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

動物が好きな人と、動物が好きなにならない人の違い。

イ 殺処分などの問題に目を向けるか向けないかの違い。
さつしよぶん ちが

動物と親しい関係を作って楽しむか、動物と距離きょりを置いて楽しむかという違いちがひ。

エ イヌやネコを飼うことを楽しむか、鳥を飼って見ることを楽しむかという違い。

問三 傍線部②「最近の人間と、ペットとしての動物とのつきあい方は、大きく歪ゆがんできているというか、非常に特殊とくしゅになつてきていると僕には感じられます」とありますが、今の人間はペットをどのようなものとして見ていますか。それが分かりやすく書かれている表現を本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部③「ペット以外には、イヌの生存の余地がない」とありますが、これはどういうことを言っているのですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

アイヌは、人間に可愛がられるために存在するようになったということ。

イ
イ又は、人間の生活に必要なじやまな存在になつてしまったということ。

ウイヌは、人間からこき使われひどい目にあわされる存在になったということ。

エ イ又は、人間と対等で持ちつ持たれつの関係をもつ存在になったということ。

問五 傍線部④「そういうベツトたち」とはどのようなベツトたちのことですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 縄張りななばを主張し人間の上に立とうとする、猛々たけだけしい性質を持った反抗はんこう的なベツトたち。

イ 自然界で持っている野生の性質を、人間側の都合でふうじられてしまったペットたち。

経験を積み自分の立場をわきまえ、主人に対し従順になったかわいらしいペットたち。

工 口輪をはめられたり声帯を取られたりしたまま、野生に戻されてしまったペットたち。

六 に当てはまる二字の言葉を本文中から探し、抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑤「大人になってもまだ母ネコからおっぱいをもらっている」とありますが、このような動物の異常行動を生み出してしまうのは、人間にどのような姿勢が欠けているからだと筆者は考えていますか。四十字以内で答えなさい。

問八 次の文の中で本文の内容として正しいものには「○」を、まちがっているものには「×」を、それぞれ

ア 動物をペットとして飼うのは残酷なことであつて、彼らを自然界の中にもどしてあげるべきだ。

動物をベツトとして飼うのは残酷なことであつて、彼らを自然界の中にもどしてあげるべきだ。

「思ふハニホトトギス」の三十一
イ
チワヤボメラニアンなどは、
身勝手な人間が自分の欲求を満
たそうと作り出したものである

「忠犬八公」は人間の従者としてのイヌではなく、人間と対等な関係にあるイヌであつた。

動物たちに精神病的な行動が出てくるため、人間の彼らに対する管理の行き過ぎはよくない

「不良犬」は人間の手に負えなくなったイヌであるから、捨てられるのもいたしかたないのだ。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

鉄三の家の前は、すこし広っぱになっているが、いまでも功、芳吉、純、四郎、武男などがキャッチボールをしていた。

四郎の投げたボールを、純がうけそこなつて、ボールはどぶに落ちた。どぶといつても、かなり大きな下水で、すぐ運河につながっている。純はあわてて、そこへもぐりこんでいった。まっ黒な顔をしてはい出てきた純の手に、ボールはしつかりにぎられていた。

ボールを投げかえして純はいった。

「どぶの中に、銀色の目をしたネズミがおるでえ」

「うそつけ」

と、いいかえされて、純はA()を立てた。

「うそやと思うのなら自分の眼めで見てこい」

それでみんな、どやどやとどぶの中へもぐりこんでいった。

はじめ四郎しろうが出てきて、つぎに功しやうが出てきた。そして顔を見合あわせて、ため息をついた。

「ほんまやなあ。あれ、ネズミの親分やで」

キャッチボールどころではなくなった。なんとか生けどりにした

子どもたちはきょうな ^B () つきで、
② たちまちにネズミを
とるしかけをこしらえた。

「鉄ツン、ここをもつとけ」

鉄ツンというのは鉄三のことである。鉄三も手伝わされて、チーズはひもでしっかり結ゆわえられた。ネズミが少しでもそれを引つづると、上から金網かなあみが落ちてくるようになってゐる。

しかけをおくために、ふたたび純がどぶの中にもぐっていった。

「銀色の目のネズミが、あのえさに食いつくとはかぎらへんで」と功がいった。

そらそうや、とみんな心配した。

「銀色の目のネズミは親分にきまつとる。うまいもんは親分が先に食うやろ」

どぶから出てきた純がいつて、みんなうなずいた。こどもたちは汗と土で顔をよごして、まるで泥水につけた古い地図のようだったが、だれも気にするものはいなかった。

目玉をぎよろぎよろさせて一時間ほどまった。まちかねて、みんなでもぐっていった。

一年生の鉄三だけが上からのぞいていた。

「あかん」——といって、みんなぞろぞろ出てきた。

かなりじょうぶなひもだったのに、ぶつとり、とちゅうでかみ切られている。

「ひつぱらんとかみ切りよったア。えらいかしこいやつちやなア」

芳吉が感心していった。

「おまえとだいぶちがうな」

と功がいつたので、芳吉は C をとがらせて、※1 なんだい、といった。

こんどは針がねでつりばりを作ることにした。えさの位置を高くして、ネズミが前足でかかえこまないと食べられないように調節した。このようにして子どもたちのチエのかたまりは、ふたたび、どぶの中へかえされた。

「どうや鉄ツン、うまいこといくと思うか」と、純が鉄三にたずねてやった。

「う」

短くうなるように、どうとつていいのかわからないような返事を、鉄三はした。いつものことなので純たちは平気だ。この仲間は話しかけることで、口数のすくない鉄三をいたわっていた。

子どもたちは日かげで、丸い輪になってすわった。まっっているあいだ、ほかの遊びをしようという気はなく、おたがいが銀色の目のネズミのことを、眼で話し合っていた。

そのうち、この仲間であつたひとり本をよく読む純が、※2 シー・トンの狼王ロボの話をはじめた。獅師たちのワナにつきつき挑戦するロボを空想して、子どもたちは背すじをぞくぞくさせた。

その興奮はそのまま自分たちが、いま、とらえようとしている銀色の目をしたネズミにつながって、胸がどきどきした。

「もうええやろか」

四郎がかすれたような声でいった。子どもたちはうなずいたものの、その気持は複雑にゆれた。銀色の目のネズミがとらえられることをのぞんではいるものの、③ そうかんたんにとらえられるようではこまる。それは、もっとしたたかで、手強い相手でなくてはならなかった。

純が先頭で、どぶの中へもぐっていった。ぴしゃぴしゃと水をける音がして、みんなはだまりこくっていた。

「やった！」

純はかん高い声でさけんだ。みんな、どきつとした。いつせいにかけよって、しかけに手をふれた。体あたりをくれるネズミの重さが、子どもたちの手にじかにきた。だれの胸もわくわくした。

（こら大っきい、こらネズミの親分にちがいあらへん、こいつやこいつや、銀色の目のネズミにまちがいあらへん）

どの子どもたちも気持がたかぶって、のどがからからにかわいた。

「目、光つとるか」

功がいつて、みんな暗闇をすかして見た。五ミリぐらいの銀の

玉がなかよく二つならんで闇の中をはねまわっていた。

芳吉がしんぼうでできなくなつて、歓声をあげた。うおーんと子どもたちの声が、せまいトンネルの中にひびいた。

ころがるようにして出てきた子どもたちは、この偉大な王様をていちように迎えるべく、頭の上にかかけて、わっしよいわっしよいかけたした。

鉄三にだかれていた※3 キチは、それを見るとびよんとはねて、後をおった。鉄三もかけた。

処理所の西のはしに、かれらの御殿がある。古い材木を組み立てて作つてあるのだが、なかなか子どもとは思えないできばえで、子どものそういう遊びには無理解なおとも、こぼかりはD おぼしとなつている。

処理所の中ではここがいちばん涼しい。

子どもたちはそこを基地と呼んでいる。いたずらをするときの根拠地でもあり、しかられて家をほうり出されたときの仮りのすまいでもある。

ネズミの王様はそこまでつれてこられた。子どもたちはこわれものでもあつかうように、おそろおそろかごとをおろした。

子どもたちが、それをとりかこんだ。眼が集中する。神さまが姿をあらわしたのだ。④ 子どもたちの熱い視線で、神さまは焼き殺されそうになつた。

しばらく時間がたつた。

さいしよに⑤ 純が腰をおろした。それから武男がすわって、純を見た。純も武男も同じ眼をしていた。

ふたりはなにもいうことがなかった。功と四郎も力なくすわつた。

いつまでもながめていたのは、芳吉と鉄三で、そのうち芳吉はE のぬけた質問をした。

「どぶの中では銀色の目玉をしていたのになア。なんでやろ」

うんざりして、返事をするのもいまましいという顔つきで功がこたえた。

「あほたれ、暗いところで光があたれば、動物の目は光るようになるつとんじや」

だれも純を非難しなかった。だが、からだの力がいつべんにぬけてしまったのか、みんなぼかんとして空を見あげていた。

しばらくして四郎がいった。

「こいつ、どないしよう」

「殺してしまえ」と芳吉がいった。

そのとき、まだネズミを見ていた鉄三がひくい声でいった。

「かわいそうや」

「そやな」

と純はいつて、芳吉の頭をぼんとたたいた。

「ネズミやから、このままにがしてやるわけにはいかんし……」

純はこまってみんなの顔を見わたした。

「川に流してやろ」

と功がいつて、みんなさんせいした。

それから、子どもたちはしかけを作ったときと同じ熱心さで、小さな木の箱をこしらえた。すぐに、うえ死にしないように箱の中にチーズを入れた。

子どもたちは広い運河まで出て、そこからネズミを流した。石にぶつからないように気をつけて流した。

（灰谷健次郎 『兎の眼』より）

【注】

- ※1 「なんどい」 Ⅱ なんだよ。
 ※2 「シートン」 Ⅱ アメリカの動物文学者。「狼王ロボ」は、『シートン動物記』の中に出てくる話。
 ※3 「キチ」 Ⅱ 鉄三がかわいいがつている犬の名前。

問一 波線部A～Eの（ ）を補うのに最も適当な漢字一字を考えて、それぞれ答えなさい。ただし、波線部A～Dまでは、補う漢字はすべて「体」に関係があります。

問二 傍線部①「顔を見合わせて、ため息をついた」とありますが、この時の四郎と功の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 純が言ったことは嘘だと思っていたのに、銀色の目のネズミがいてがっかりしてしている。
 イ 純が口からでまかせで言ったことなのに、ほんとうに現実のことになりびつくりしている。
 ウ 純が言ったことはほんとうのことだったから、純が嘘つきではなかったとほっとしている。
 エ 純が言ったとおりだと思うと同時に、息をのんでネズミを見ていた気持ちがほぐれている。

問三 傍線部②「たちまちにネズミをとるしかけをこしらえた」とありますが、このしかけではネズミは捕れず、子どもたちは新たにしかけを作り直しました。その作り直したしかけを、たとえを使って表現した語句を本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部③「そうかんたんにとらえられるようではこまる」とありますが、子どもたちがそのように考える理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 銀色の目のネズミが狼王ロボのような手強い相手でないと、張り合いがなくなるから。
 イ 銀色の目のネズミを早く捕まえないと、ほかの遊びをする時間がなくなってしまうから。
 ウ 銀色の目のネズミが簡単に捕まると、純が話す狼王ロボの話が嘘になってしまうから。
 エ 銀色の目のネズミが手強い相手でないと、大人に自分たちのすごさを伝えられないから。

問五 傍線部④「子どもたちの熱い視線で、神さまは焼き殺されそうになった」とありますが、これは子どもたちのどのような様子をたえたものですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 遊びの道具として用いようと、ネズミをよく観察している様子。
 イ 慎重に慎重を重ねて、ネズミをていねいにあつかっている様子。
 ウ 期待に胸をふくらませて、ネズミを夢中になつて見ている様子。
 エ 尊敬する気持ちをなくしながらも、ネズミを凝視している様子。

問六 傍線部⑤「純が腰をおろした」とありますが、純が腰をおろしたのはなぜだと考えられますか。五十字以内で答えなさい。

問七 本文について述べたものとして正しいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 鉄三は口数が少なく仲間にはかにされていたが、時々、みんながなるほどと思えるような意見を言っておどろかせることがあった。
 イ 銀色の目のネズミは親分、王様、神さまとさままにたとえられ、それは気持ちが高ぶっていく子どもたちの心理を表している。
 ウ 子どもたちは銀色の目のネズミの捕獲に何度も失敗したためにいらだちをかくすことができず、仲間割れをすることが多かった。
 エ 純は銀色の目をしたネズミがいると言ったり、狼王ロボの話をしてたりしてみんなをだましたため、子どもたちからの信頼を失った。
 オ 子どもたちは捕まえたネズミをどうするか悩んだが、殺すのはかわいそうだと思って、優しさをもってネズミを川に流してあげた。
 カ 銀色の目のネズミを捕まえて駆除することで大人に認められようと思っていたのに、子どもたちの試みは失敗に終わってしまった。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

八歳で将棋を始めてからこんにちまでの約二〇年間、私はずっと将棋というものに真剣に取り組んできました。その中で、いくたびとなく直感やひらめきのすごさを感じたり、救われたりしたことがありました。

たとえばある局面で「この桂馬が取れる。カッコウになれば勝てる」という直感が働き、それが現実となり、その勝負に勝てたということがあります。良いと思われる手が、脳裏にひらめくわけです。ここで言う「直感」や「ひらめき」とは、思いつきや、動物的勘や、なんとなく浮かぶアイデアとは少し違います。あえて言葉にするなら、自分の経験や※1鍛錬や体験によって蓄積されたデータを引き出せる力という感じでしうか。

人は何かを好きになったり興味を持ったりすると、それに対して、情熱をソソぎ、努力を惜しまず、多くの時間をツイやすことができます。そういった経験を積み重ねていく中で、現状を打破したいときや他の方向性を見いだしたいときに、①魔法のように働く力ではないかと思うのです。《中略》

私は、「記憶」には二種類あると感じています。

過去の出来事や思い出は「ああいうことがあったな」と意識的に思い出せます。でも、直感やひらめきは、自分では意識的には思い出せない記憶なのではないかと思うのです。

ヨウするに以前に経験していたり、一度ならず考えたことがあったり、または似たような体験がある、それらを体で覚え込んでいて、必要なときにふと思いつける種類の記憶ということです。実際、ある手がひらめくとき、私は脳ではなく、体そのものが反応しているように感じることがあります。

将棋の実戦は生き物であり、盤上でどんどん変化するので、その場その場の対応が求められます。

そのときに、どれくらい勉強してきたかが勝負の分かれ道です。いかにたくさん経験を積んでいるか、いかに状況把握できているか、それをどうすることが一番自分にとって大切な、その見極めが勝負を決めるのです。

また、将棋は必ずしも良い手の積み重ねで勝つのではなく、大

事な局面で間違えたほうが負けるゲームでもあります。つまり、② 応用できる引き出しは多ければ多いほどいいということになります。

勝利に結びつくパターンを一つか二つしか持っていない人は、局面が複雑になってくると、対応ができなくなり、間違えてしまう可能性が高くなります。

逆にいくつも引き出しを持っていれば、何か物事を創り出そうとするときに「これとあれとそれを合わせてみたらどうなるのだろう？」と無意識的に考えることができます。

そこから新しい方法や方向性が生まれるのです。

そのたぐさんの引き出しから、正しいタイミングで正しい答えを取り出す能力が、「直感」や「ひらめき」です。将棋を学べば学ぶほど、その能力は磨き抜かれていくのではないかと私は感じています。

直感やひらめきの力を信じていても、それが正しくなければ意味はありません。

大山康晴十五世名人は、「あまりカンに頼るな」と書かれています。大山先生は「しっかりと指す手を考え、読みの裏づけをして、自信を持って指さないといけない」と考えていらつしやったのでしよう。

では、③ 正しい直感やひらめきは、いったいどのように鍛えられるのでしょうか。

【注】 ※1 「鍛錬」 訓練を積んで心身をきたえたり、技能をみがいたりすること。

※2 「棋譜」 互いの対局者が指した手を順番に記録したもの。

※3 「感想戦」 対局後に開始から終局までを再現し、対局中の手のよしあしなどを検討すること。

問一 傍線部 a↘e のカタカナをそれぞれ漢字に改めなさい。

問二 傍線部 ① 「魔法のように働く」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 良いと思われる手が、似たような体験もしていないのに思い浮かぶということ。

イ 良いと思われる手が、記憶の引き出しの中から意識的に取り出されるということ。

ウ 良いと思われる手が、これまでの経験にもとづいてふと思い浮かぶということ。

エ 良いと思われる手が、読みの裏づけの中から論理的にひねり出されるということ。

問三 傍線部 ② 「応用できる引き出しは多ければ多いほどいい」とありますが、「引き出し」というたとえは何を表していますか。この傍線部より前の本文中から二十字以上、二十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ書いて答えなさい。

問四 傍線部 ③ 「正しい直感やひらめきは、いったいどのようなように鍛えられるのでしょうか」とありますが、筆者は正しい直感やひらめきは

どうすることによって鍛えられると考えていますか。[] によって鍛えられる。[] を補うのに適当な表現を、本文中から三十文字以上、四十文字以内で抜き出して答えなさい。

問五 筆者は八歳から約二〇年間、将棋に打ち込んだようですが、あなたはどんなことに打ち込んできましたか。次の条件にしたがい、百字以上、百四十文字以内で作文しなさい。

条件1 まず、最初の段落に、あなたが打ち込んだものを一つあげ、それにどのように打ち込んできたかを書きなさい。

条件2 次に、段落を改めて、その体験の中からあなたが学んだことを書きなさい。

それはやはり、ひたすら勉強することだと思っています。

私は、公式戦だけで四三七局を戦っています。(二〇〇九年三月末日現在)。練習も入れたら大変な数です。その一局一局が、私にとつてのひらめきの元となる「財産」です。

もちろん、指しただけではすぐに内容を忘れてしまうので、研究会などで指した将棋も自分で ※2 棋譜を書いてデータとして残しておくことがあります。 ※3 感想戦でポイントになったところもメモします。

英会話の勉強法などと同じなのではないでしょうか。単語や文法を覚え、それと並行して実際に英語でたくさん会話し、会話の中で間違つたことや理解できなかったことをチェックする。その繰り返しによって話せるようになるのだと思います。

将棋も、まずは自分で研究し、研究会や対局で試みて、勝てばその方法論をさらに ※1 キョウゴなものにし、負ければ何がいけなかったかを学びなおす。その繰り返しで、強くなるのです。

ですから、直感やひらめきだけを鍛えるということはできません。大きな情熱を傾けて何かを学び、それを何度も実践に移し、引き出しをどんどん作る。これこそが、正しい直感やひらめきを鍛える基礎だと思っています。

(茂木健一郎・矢内理絵子著 『女脳 ひらめきと勝負強さの秘密』より)

一

八	七	六	五	四	三	二	一
ア							a
イ							b
ウ							c
エ							d
オ							e

二

七	六	五	四	三	二	一
						A
						B
						C
						D
						E

三

五	四	三	二	一
				a
				b
		}		c
				d
				e